

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	高松市立川岡小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	2	2	2	2	11	17
児童数	36	19	40	48	46	50	6	245	

研究の概要

1. 研究主題

個が輝く学校づくり ～学び合う楽しさを求め 自己学習力の育成を図る～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>5・6年生 算数</p> <p>高学年は、学習の理解・習熟度の差が大きくなり、補充が必要な児童と、ぐんぐん伸びる児童とが出てくる時期である。児童が自分を知り、自分のよさや課題に応じて選択できる学習コースを開発し、基礎的・基本的内容を確実に身につけさせたい。また、自分にふさわしい学び方を見つけさせるための工夫でじっくり学ばせる。</p> <p>4・5年生 理科</p> <p>科学的な思考や実験技能などの基礎的・基本的事項をきちんと身につけさせるとともに、理科好きな児童を育成する。</p> <p>全校生 つつじの時間</p> <p>学年の発達や実態に応じて、ゲーム化したり、競争したりして、楽しみながら学習する時間を特設する。ここでは、他者からの評価を気にせず、友達とじっくり学び合い、切磋琢磨するなかで、「知らず知らずのうちに学びの力」を付けることが主なねらいである。また、集団の中で、飽きずに繰り返し学習ができるような工夫をする。そして、学年が上がるにつれて、自ら学びを創り出す喜びも獲得させる。</p> <p>全校生 国語</p> <p>学習状況調査の結果、本校の児童に付けなければならない力の一つが漢字の力であった。自作で漢字検定を開発・工夫することで、単に漢字を覚えるだけでなく、熟語として、生活に使える漢字の使い方など、漢字を覚えて使える学び方自ら見つけるような指導体制を開発する。それによって、書く力の定着と自らの課題を見つけ自ら学ぶ子の育成を図るようにする。</p>

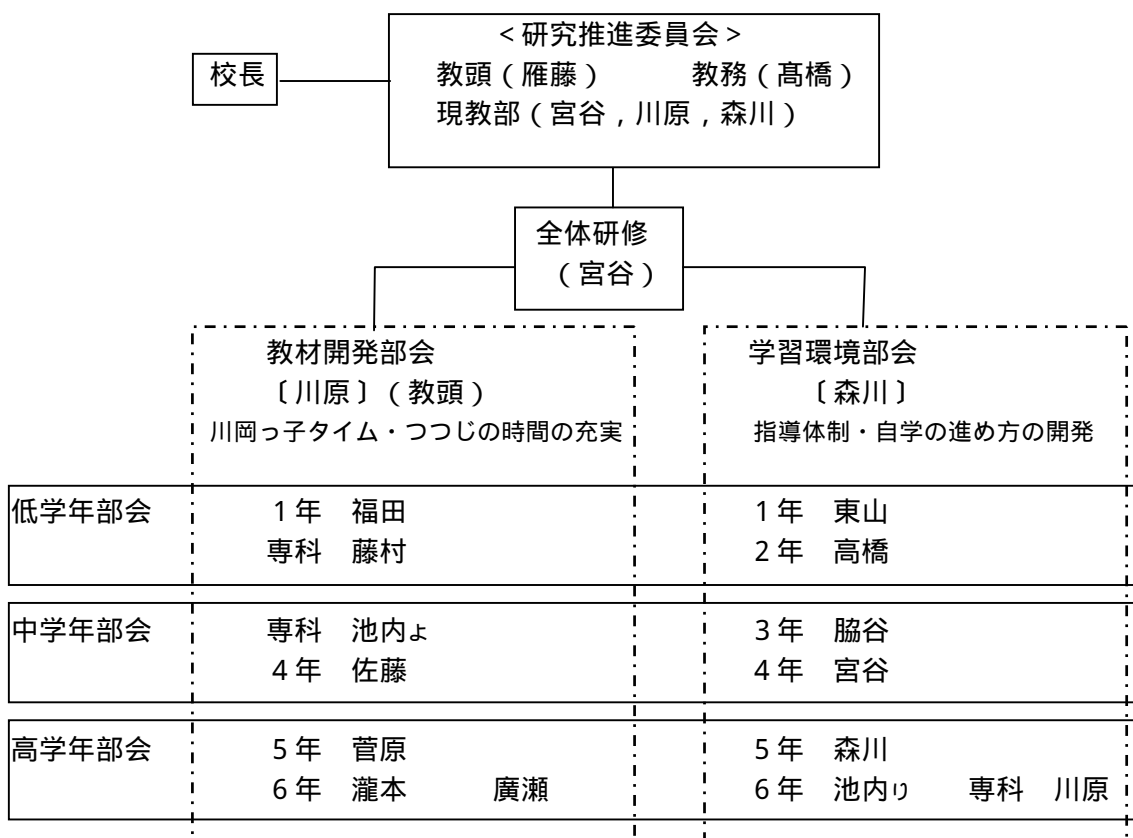
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ</p> <p>個が輝く学校 ～学び合う楽しさを求め 自己学習力の育成を図る～</p> <p>研究の見通し</p> <p>子どもの意欲や主体性を発揮する機会を創る。自分のよさ・得意を知り、それを生かす活動の工夫をする。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>・「教え・教わる教育」から「自ら学び、学び合う教育」システムの開発</p>
--------	--

平成15年度	テーマ（継続） 個が輝く学校 ～学び合う楽しさを求め 自己学習力の育成を図る～ 研究の見通し 自分の得意なことや課題を知ることで、自分に合う学習方法を見つけ、自己学習（自学・宿題）への意欲を高める。また、よさを生かすことで成就感や貢献感を味わいながら、自己を肯定的に見る力を高める。
	研究の内容・方法 ・単元別コース選択学習と個に応じた指導体制の整備 ・実態に合った教材開発と指導内容の整備 ・学びを楽しむ環境づくりと事例づくり 特設「つつじの時間」の設置

平成16年度	テーマ（予定） 個が輝く学校 ～楽しく学び合い、ともに伸びていく子どもの育成～ 研究の見通し 友達のよさを知り認め合うことで、協調したり助け合ったりする学習を実践し、子どもたちが学びを楽しむようにする。
	研究の内容・方法 ・よさを学び合う 共生の考え方を生かす指導体制づくり ・学びを楽しむ環境づくり ・個の実態に応じた、個別の支援体制づくり （学力向上支援ボランティア活用）

(3) 研究推進体制（平成15年度）



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究開発

(1) 集団での知のつくり方の研究

学校には、たくさん子どもたちが集まってくる。同じ年齢の子もいれば異年齢の子もいる集団である。そして、学校は子どもたちの学びの社会である。そこで、学校でしかできない、集団での知のつくり方、みんながやっているから自分もやれるそんな環境づくりを開発・工夫することができた。

朝の活動「川岡っ子タイム」 例：全校一斉の読書活動（15分間読書）

漢字やる気まんまん検定（10級・100コース）

(2) 集団で切磋琢磨する学習環境の設定

学校は、多様な個性やよさをもつ子どもの集まりである。その集団のなかで、自分のよさを発揮し、様々な活動に挑戦して、自分のよさや可能性を磨く環境をつくることができた。

特設「つつじの時間」 例：よく遊びよく学ぶ教材の開発と実践

児童会活動 運動会や行事など、児童会主催の活動

(3) 支え合い認め合う学習スタイルの開発

学級では、自分の得意・よさを生かして係活動を展開する。復習や予習の問題を作ったり教え合ったりする活動を展開する。また、異学年ペア活動にも、自分のよさや技能を生かして「出前授業」を展開するシステムづくりを行った。

ペア活動の時間 例：出前授業

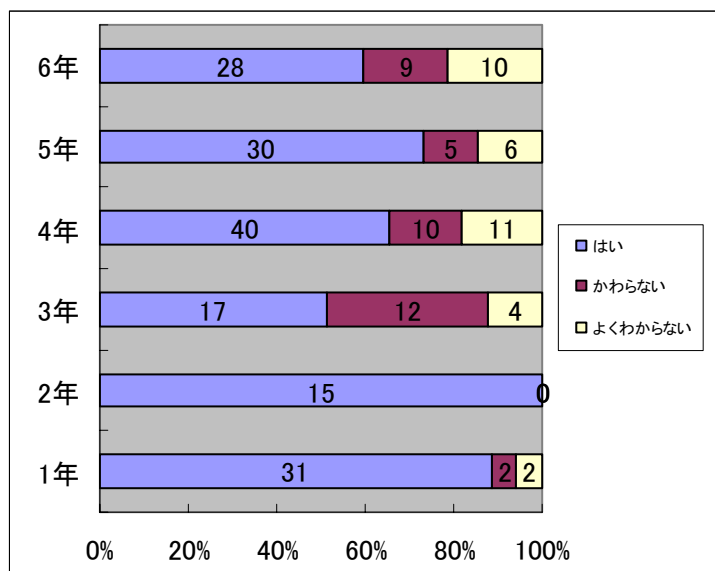
2. 研究の成果

今年度の学力向上フロンティア事業の研究開発や活動の成果を子どもの目線に立って評価した。下記のグラフは、子どもたちの自己評価をアンケートした結果である。

（実施日：平成16年2月6日、対象：全校生：質問内容によっては4年生以上）

【具体的成果】（児童のアンケートから）

4月に比べて自分の力は伸びていますか（学習において）



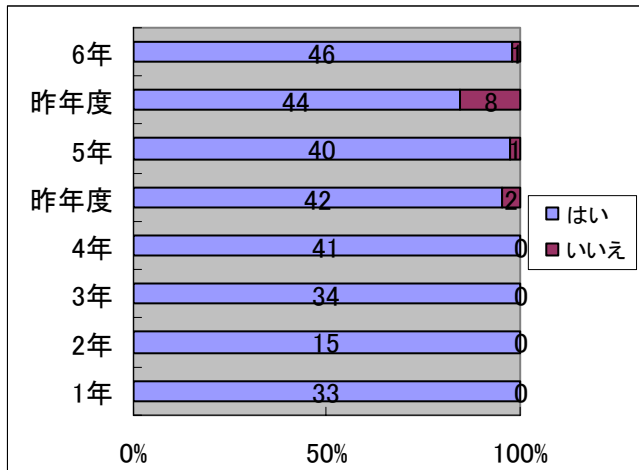
高学年は、60%以上の児童が「伸びている」と答えている。高学年では、好きになった教科に「算数科」がトップにあげられている。少人数学習による自分の学びに合う学習コースが選択でき、きめ細かな学習で分かりやすくなった結果が表れているととらえている。

「分かる・できる」授業が、児童の自分自身の伸びの自信につながっていると思われる。高学年に「よく分からない」と答える児童が約1割見られる。今後、こうした児童に対して、自分の伸びが自分で確認できるような自己評価の実施と、達成感や成就感が得られるような支援体制や

教育内容の改善を行っていく必要があると考えている。

川岡っ子タイムは役立つ時間になったか（朝の15分間活動）

4領域（スポーツ・ドリル・読書・表現）で実施している川岡っ子タイムは、1年生から4年生

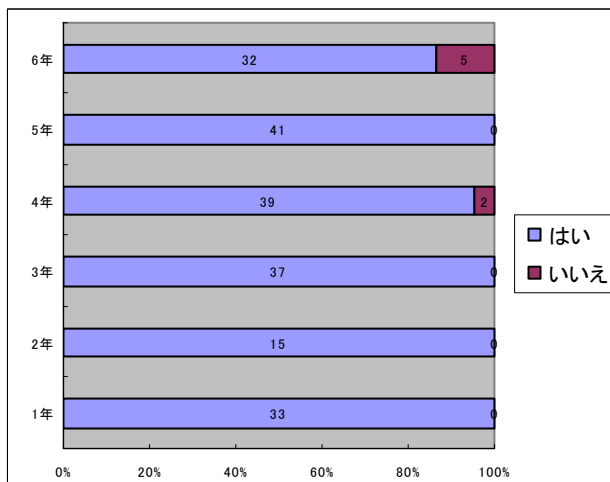


まで100%の児童が自分にとって役立つ時間であると答えている。また、5年生、6年生も昨年度に比べると「役立つ」と答えている児童の割合が増えている。領域別では、今年度から実施している「漢字検定」に自分の伸びを感じている子どもが多い結果が得られた。また、低学年では「読書」と答えている児童の割合が多く、ペア学年や図書館指導員による「読み聞かせ」を実施した成果ととらえている。

さらに、児童に、漢字検定に取り組んでみての感想を聞いた結果、「たくさん覚えることができた」「ていねいに

書くようになった」「止めはねはらいを正しく書くようになった」「自分から練習するようになった」と答えている。 に関しては、今年度、この検定で育てたい力としてねらっていた「自らの練習方法を探る」につながるものと考えている。高学年では、漢字検定を「自学(宿題)」と結びつけ、家庭学習とリンクさせながら、自分の課題を見つけ、自分のよさや伸びを実感する結果につながった。

特設「つつじの時間」(木曜日の5校時)は役立つ時間になったか

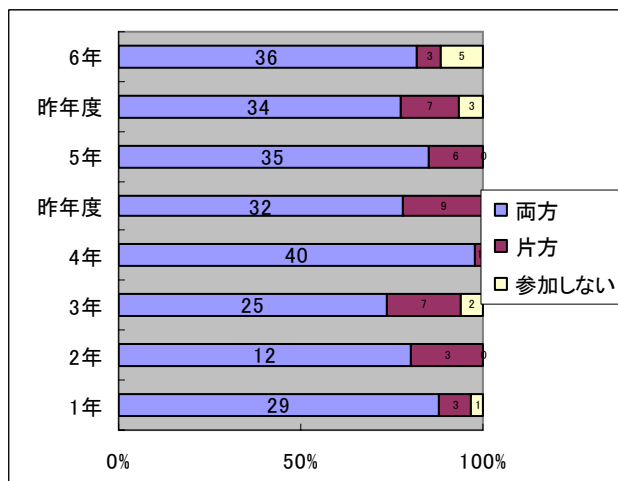


昨年度特設した時間である。6学年のうち、4学年の児童が100%自分にとって役立つ時間になったと答えている。

この時間は学びを楽しむ時間であり、友達と切磋琢磨しながら挑戦する時間である。各学年50%以上の児童が「楽しみながら学習できた」と答え、続いて「協力できた」、「問題に挑戦できるようになった」と答えている。

高学年の児童は「ペア学年の子に教えることができた」「男子とも協力できた」と、前向きに答える児童が増えてきた。

児童会種目や集いの「ボランティア」に参加しましたか



運動会における児童会種目の選択や、川岡の集い(行事:総合的な学習発表会)の準備・運営も、自分を知り、自分のよさを生かすことができる場ととらえ、子どもたち自ら考え・判断する機会とした。

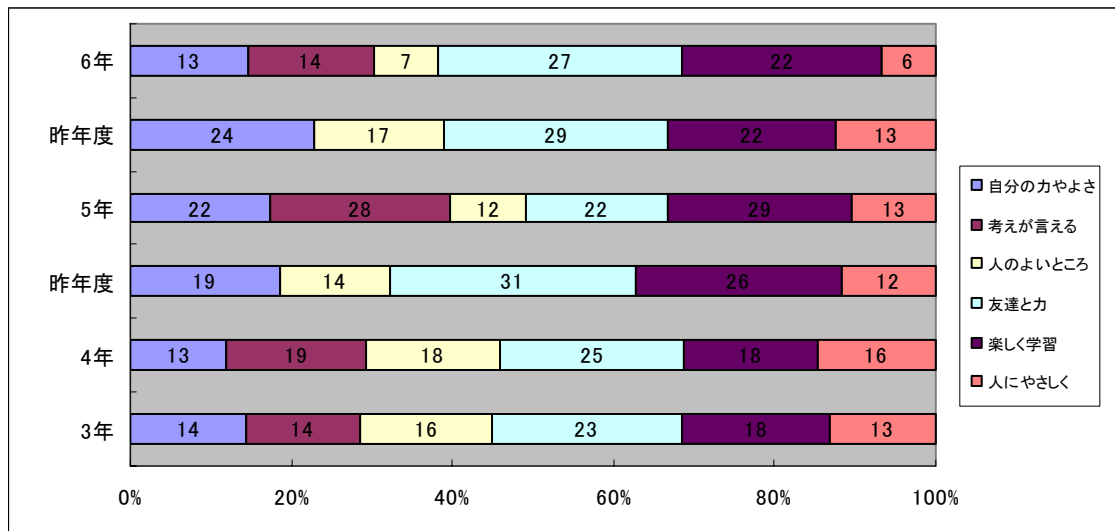
両方のボランティアに参加した子どもが大半であり、「他学年の人と協力できた・仲良くなった」「人の役に立った」という満足感・貢献感などを得ている。

昨年度に引き続き、自分の好きなことや得意なことから取り組むことで、子どもたちは「自分を知り、自分のよさを生かす」機会になったととらえている。

昨年度の経験や友だちをモデルにして、一人ひとりが自分を輝かせる場や自分を生かせる道を見つけ出している。得意なことを発揮させることで意欲を高め、そして、少し不得意なことでも、友達となら一緒に挑戦できる子を6年間で育てていきたいと考えている。

1 5年度に自分が伸ばした力は何ですか

今年度の成長した力を、4・5・6年生に聞くと、「友達と力を合わせる」「楽しく学習する」などが多くあった。この点においても、今年度の研究内容である【学びを楽しむ環境づくり】の成果がでているとらえている。



3. 今後の課題

今年度は、学校という集団でないと効果がでないものに目を向け、みんながいるからがんばれる「集団での知のつくり方」、集団のなかで「切磋琢磨する学習環境づくり」支え合い認め合う「学習のスタイル」の開発研究を実践してきた。これまでに、指導体制づくりや学びの環境づくりはほぼ整ってきたので、今後は、このシステムで効果の出ない子、気になる子への支援体制づくりを整えていくことが緊急の課題である。また、学校では、自分の課題や学び方を知るとともに、それを家庭学習とリンクさせながら、より課題を追求できる子、課題を克服できる子の育成を図りたいと考えている。一人ひとりの課題が異なる子どもの学習を促進する指導組織の充実を継続しながら、子ども自身が自分の学習状況や伸びをモニタリングできる力を伸ばす研究をしていきたい。

学力等把握のための学校としての取組

1. 算数科・国語科・理科において単元ごとの自己評価「単元作文」の実施
2. 校内研究会を公開し、授業説明をするとともに保護者の意見を聞く機会を工夫する。
3. 漢字検定の実態把握と情報交換をする。自ら学びを工夫したり改善したりできる力を見極め、支援・援助の必要な子への関わり方の研究をする。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

今年度は、次のような形で研究の成果の普及を図った。

1. 指導体制や研究内容の説明

保護者への説明（4月）をする。

地域・保護者への具体的な説明（7月）を体育館でする。

学校だより（年間6回）で、中間報告や活動の様子を報告する。

2. 授業実践の公開

各学年1回以上、少人数授業を公開した。それとともに、授業のねらいや成果等についても説明した。それ以外にも、

香川県小学校教育研究会高松支部の研究会を開き、授業を公開した。

平成16年1月22日(木) 高松市立川岡小学校

3. 研究内容の照会とポスターセッション

東讃地区協議会での説明 7月31日(水) 三木町交流文化プラザ

学校改善研究事業 12月25日(木) 綾歌町アイレックス

東讃地区協議会での説明 2月10日(火) 牟礼町公民館

今年度も、様々な機会をとらえて、授業公開及び取組に対する説明(ポスターセッションなど)を行ってきた。その度に、研究の内容を紹介しながら成果と課題を検証することができた。また、多くの方から参考になる意見をもらうことができた。これらの成果をまとめて、ホームページに学力向上プログラムの取組、成果などを掲載する予定である。 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下	7～12学級		
	13～18学級	19～24学級		
	25学級以上			
【指導体制】	少人数指導	T・Tによる指導		
	一部教科担任制	その他		
【研究教科】	国語	社会	算数	理科
	生活	音楽	図画工作	家庭
	体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	